

Steel 鉄の点景 Landscape

かつてっこう

褐鉄鉢

2001年9月、奈良県の唐古・鍵遺跡から、弥生時代、
今から約2000年前の褐鉄鉢の容器が発見された。
褐鉄鉢の容器には弥生時代最大級の勾玉が納めら
れており、褐鉄鉢と勾玉の組み合わせは過去に例がない。
現代に姿を現した褐鉄鉢は、古代の精神世界を解く
カギとして、また出土品を検証する手がかりとして、
にわかに脚光をあつめている。

弥生時代最大級の勾玉
を抱いた褐鉄鉢

背景は奈良県の唐古・鍵遺跡発掘現場

(写真提供：田原本町教育委員会)

魂を秘めた地下からの贈り物

奈良県田原本町にある唐古・鍵遺跡は弥生時代の大環濠
集落として知られる。同町教育委員会の発表によると、唐古・
鍵遺跡第80次調査で、弥生時代中期後半の褐鉄鉢の容器
が発見された。褐鉄鉢の容器は長さ14cm以上、横13cm、高さ
7.1cmの楕円形で、一端がうち抜かれており、中は空洞、長さ
4.7cmと4cmの弥生時代最大級の勾玉2個が納められていた。
褐鉄鉢との組み合わせはこれまでに例がなく、森浩一同志
社大学名誉教授は、「弥生人の精神というか知的レベルを知
るうえで、僕はこの50年間で最大の地下からの贈り物だとみて
いる」(読売新聞2001.10.11)と非常に高い関心を示している。

褐鉄鉢の容器は、砂礫層中にある良質な粘土に鉄分が
付着し、粘土だけが風化して形成される。振ると音が鳴るため
「鳴石」とも呼ばれる。

中国では褐鉄鉢の容器を「禹余糧」または「太一(乙)余糧」
と呼ぶ(禹は中国夏王朝の王、太一は天の神で禹の師)。漢
の劉向(紀元前77～6年頃)の著作とされる『列仙伝』や魏晉
時代(3～4世紀)の『神農本草經』にその記述が見られ、禹余
糧は神仙思想に基づく不老長寿の仙薬として珍重されてい
た。日本では、正倉院御物のなかに、「太一禹餘糧」として残
り、また光明皇太后が756年、聖武天皇の遺品を東大寺に
献納した「種々薬帳」にも記載されている。これまで神仙思想
を示す最古のものは奈良時代とされてきたが、今回の発見
で、はやくも弥生時代には中国の神仙思想が伝わり、褐鉄鉢
の容器を用いて不老長寿を願ったのではないかという考え
が出ている。また、人の魂を表す勾玉を胎児とし、褐鉄鉢の
容器を母親の子宮と見たてた安産祈願説も出ているが、勾
玉と褐鉄鉢の組み合わせは前例がなく、解明は始まったば
かりである。

血や太陽を示す特別な「赤」

時として遺跡の出土品のなかには、赤く着色されたものが発見されることがある。縄文時代前期頃から、耳かざりや浅鉢など、祭祀に使われたと思われる土器に多く着色されている。これら土器の赤い顔料の母材に、加熱した褐鉄鉱が使用されているという。東京都埋蔵文化財センター主任調査研究員上條朝宏氏によると、赤い顔料の母材は酸化鉄、水銀朱、鉛丹等が考えられ、酸化鉄から生成された赤色物質は一般にベンガラ(酸化第二鉄)と呼ぶ。出土状況を見ると、ベンガラはなぜか二つの扱い方をされており、ひとつは土器に保管された状態で出土され、ひとつは住居床面等に点在した状態で見つかる。顕微鏡で分析すると、それらはパイプ状物質を含むものと含まないものに分かれることがわかった。パイプ状物質を含まないものは、沼地に近い場所の褐鉄鉱(Bog Iron Ore)や火山灰と粘土層の境にできる板状の褐鉄鉱(Limonite)が母材と考えられる。パイプ状物質を含む顔料の母材は、褐鉄鉱とも赤鉄鉱とも言われ確定していない。入手しやすい褐鉄鉱を母材とする顔料はパイプ状物質を含む顔料の代用品として使用し、入手しにくいパイプ状物質を含む顔料は、当時の貴重品だったのではないかと推測されている。

茨城県の虎塚古墳(7世紀前半頃)で発見された石室には、成人男子と思われる遺骸が一体見つかった。その石室の壁面

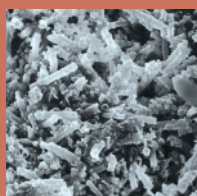


パイプ状物質で赤く色付けられた縄文時代中期の土器

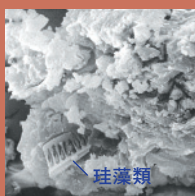


素地に褐鉄鉱を練り込んで焼き赤く発色させた古墳時代前期の土器

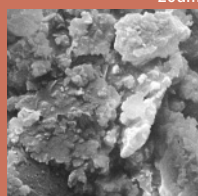
土器に付着した赤色顔料



パイプ状物質を含む赤色顔料



母材は沼地付近でできた褐鉄鉱



母材は板状の褐鉄鉱



ベンガラで赤く幾何学模様が描かれた石室(茨城県ひたちなか市の史跡・虎塚古墳)

にはベンガラで、魔よけの意味を持つと言われる連続三角文等が鮮やかに描かれていた。祭祀やまじないに使ったり、埋葬に用いたり、血や太陽を示すベンガラの「赤」は特別な意味を持っていたと考えられている。

過去を探る有効な手がかり

現在、前・中期旧石器時代の石器に対して、その信憑性が問われることとなっている。多くの事実が明らかになる中で、今回有効な検証法の一つとして褐鉄鉱を用いた方法が採用された。

提唱者は、日本考古学協会旧石器問題調査研究特別委員会総括部会委員の菊池強一氏である。菊池氏は石器自体を地層を構成する堆積物ととらえ、石器に付いた褐鉄鉱の条痕模様を分類した結果、そのうち自然に付着したものと人為的に付着したと考えられる模様を突きとめた。^{*1}人為的な行為に伴い付着した褐鉄鉱は、発掘時に鉄製の移植ゴテやスコップ等でこすった場合を除いては、農作業に起因すると考えられる。地中深い旧石器時代の地層から出土した石器であれば、農作業に伴う褐鉄鉱が付くはずがない。もしそれが確認されれば、その石器は地表近くの別の場所にあったと考えられる。実際、従来の考古学的検証法とこの科学的検証法をもとに調べた結果、岩手県の瓢箪穴遺跡(ひょうたん)の中期旧石器とされた76点のうち75点が、不自然な褐鉄鉱の痕跡等から他の場所から持ちこまれた可能性が高いとされた。^{*2}また、地層の状態から判断しても、同遺跡は褐鉄鉱が形成できる地質が縄文時代の最下層の地質のみとなっており、それ以外の旧石器時代の地層から褐鉄鉱が付着した石器が出土するとは考えにくい。この他にも、宮城県の上高森、座散乱木遺跡、福島県の一斗内松葉山遺跡、山形県袖原3遺跡等で人為的な行為に伴い付着したと判断される褐鉄鉱が見つかった。

過去への有効な手がかりとして、褐鉄鉱は今後多くの謎を解き明かす情報が詰まっている。褐鉄鉱が示すいくつかのヒントは、古代を探る貴重な資料となるだろう。

*1:『科学』Vol.71.2001(岩波書店)

*2:日本考古学協会調査研究特別委員会第1作業部会と岩手考古学会の記者発表(2002.1.14)による。

●取材協力 奈良県田原本町教育委員会、同志社大学名誉教授森浩一氏、(財)東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター主任調査研究員上條朝宏氏、茨城県ひたちなか市教育委員会、日本考古学協会旧石器問題調査研究特別委員会総括部会委員菊池強一氏(岩手県立西和賀高等学校校長)